日本糖尿病学会　国際交流委員会・将来計画委員会　若手支援企画：2026 年海外学会参加支援

第 62 回 EASD 参加レポート
― 若手の視点から ―

植木　響政会員
（順天堂大学大学院　代謝内分泌内科学講座）



1. 参加学会

62nd Annual Meeting, European Association for the Study of Diabetes
https://www.easd.org/annual-meeting/easd-2026/
2026 年 9 月 28 日(月)～10 月 2 日(金)　ミラノ(イタリア)

2. 参加の目的

糖尿病学に関する最新の研究・臨床知見を幅広く収集するとともに、各国の研究者との交流を通じて、国際的な研究動向や学会活動、診療の現状を把握しました。ブース担当者として様々な職種の来訪者との情報共有を行い、日本の糖尿病学会との違いや共通点を比較し、今後の研究活動および国内での学会活動の発展に活用することを目指しました。

3. 学会参加の体験

渡航前には、事前に提供された資料や過去の担当者による報告を確認し、JDS の活動内容やブース業務について理解を深めた上で参加しました。会期中は、欧州、アジア、南米、アフリカなど多様な地域からの来訪者との交流の機会に恵まれましたが、実際のブース対応では、事前に想定していた以上に幅広い知識と柔軟な対応が求められました。JDS の活動内容やデータベース研究に関する質問に加え、企業関係者からの自社製品に関する情報提供、さらには実際に糖尿病治療を受けている方からの先進的な治療に対する要望など、我が国の糖尿病診療のみならず、日本の医療や研究環境、市場に対する国際的な関心の広がりを実感する機会となりました。



特に、日本における糖尿病治療の目標や診療の現状、研究者を対象とした研究・留学助成制度についての質問が多く寄せられました。また、アジア圏からの来訪者からは、2026 年 12 月に開催予定の ATTD-ASIA 2026 についても高い関心が示され、我が国の糖尿病研究・診療に対する期待の大きさを感じました。さらに、ブースで配布したノベルティや折り紙の鶴も非常に好評であり、日本文化の一端に触れていただくことを通じて、学術交流にとどまらない国際交流の一助となったことも印象に残りました。

ブース業務以外では、自身の研究テーマである膵 β 細胞におけるアミリンとオートファジーの関連について Short Oral Presentation の機会を頂きました。各国の研究者と具体的な質疑応答や意見交換を行いながら、自身の研究の立ち位置を国際的な研究コミュニティの中で客観的に捉えるとともに、今後取り組むべき研究課題や方向性を改めて考える貴重な機会となりました。私は基礎研究の観点からアミリンのクリアランスに着目して理解を深めておりますが、今回の学会では実際にアミリンを標的とした複数の製剤で良好な臨床研究結果も報告されており、基礎研究で得られた知見が実際の臨床応用へとつながる好例に触れることができました。こうした成果を通じて、基礎研究と臨床研究を相互に結びつけ、両者を循環させながら研究を発展させていくことの重要性を改めて認識しました。



4. 学会の成果

臨床研究の面では、前回参加した EASD 2023 と比較して学会全体の規模がさらに拡大し、肥満症や膵島移植、人工知能（AI）に関連する演題も増えていることが印象的でした。これは、糖尿病診療を取り巻く世界的な動向が変化し、肥満症が糖尿病の発症・進展のみならずその予防や治療を考える上でも重要な課題として認識される一方、膵島移植や AI を用いた治療アルゴリズムの決定など、糖尿病の先進的な治療についても臨床応用に向けた研究が着実に進展していることを反映していると感じました。

一方、基礎研究では、従来から研究が進められてきた膵 β 細胞の病態生理や糖尿病関連合併症、代謝異常の分子機構などのテーマに加え、近年注目が高まっている「老化」に関する研究も多くの関心を集めていました。これは、代謝異常を包括的に捉える研究から個々の臓器・細胞における老化の分子機構へと研究対象がより細分化され、その病態的意義の解明が進んでいることの表れであると感じました。このような世界的な研究トレンドの変化の中で、世界有数の高齢社会である日本が蓄積してきた知見や経験は、今後の糖尿病医療の発展において世界に発信すべき重要な知見となり得ると考えます。

5. 今後の抱負

糖尿病に関する研究に着手してから 6 年が経過しましたが、その間に新規薬剤の登場や糖尿病の病態を支える分子機序の理解が一層深まるなど、研究を取り巻く環境は大きく変化しました。今後はこうした研究の潮流の変化を柔軟に捉えながら、自身の研究成果を公的な知見として発信し、糖尿病の病態理解や新たな治療法の開発へとつなげることで、糖尿病領域の発展に還元していきたいと考えています。

日本糖尿病学会の一員として EASD に派遣されることは、学会活動を海外の研究者や医師に発信し、他国の学会活動や医療・研究に対する考え方に触れる中で、国や文化による価値観やコミュニケーションの違いを知る貴重な機会であると考えます。それに加えて、自身の研究分野における最新の知見や世界的な研究動向を学び、それを今後の研究・診療へ還元することもできます。こうした経験は、研究者としての視野を広げるだけでなく、一人の医師として日本の糖尿病医療をより俯瞰的に捉える視点を養う上でも大きな意

味を持つものだと感じました。今後 EASD への派遣を検討される先生方にとっても、ぜひ積極的に参加し、研究・診療にとどまらない多様な学びや交流を得る機会として活用していただければと思います。

6. その他

この度は EASD 学会への参加に際し、ご支援を賜りました植木浩二郎先生をはじめとする JDS の諸先生方、事務局および関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。また会期中にブース担当をご一緒させて頂きました事務局の金子結香様、島根大学の四方田美和子先生、金﨑啓造先生、そしてご指導・ご推薦を頂きました順天堂大学の西田友哉先生、綿田裕孝先生に心より御礼申し上げます。

幸運なことに、私はこれまで複数回にわたり海外学会に参加する機会に恵まれましたが、そのたびに、日本の研究者として世界に伍する研究を目指すことへの情熱を改めて思い起こさせられます。このレポートが、分野を問わず同じ志をもつ若手研究者の皆様にとって、海外学会への参加や国際的な研究活動に踏み出すきっかけとなり、新たな刺激や研究へのモチベーションにつながれば幸いです。